

地域における子育て環境：子どものレジリエンスを育む

著者	福岡 孝純, 谷本 都栄
出版者	法政大学スポーツ健康学部
雑誌名	法政大学スポーツ健康学研究
巻	4
ページ	59-67
発行年	2013-03-30
URL	http://doi.org/10.15002/00008717

地域における子育て環境 ～子どものレジリエンスを育む

Child Care Environment in the Region —Building Resilience in Children

福岡 孝純¹⁾、谷本 都栄²⁾

Takazumi Fukuoka, Toe Tanimoto

[要旨]

子ども達を取り巻く環境が大きく変化するなかで、現代の子ども達の“生きる力”（レジリエンス、回復力）が弱体化している。本論では、子どもの心身の健全な成長を導くためには、どのような生育環境が望ましいかについて、地域の再生、多様な遊び空間の確保、経験豊かな指導者によるフィールドワークの実践などの側面から提言した。また、スポーツ的精神や新しい倫理学を提示しながら、子どもの心と体を甦らせ、地域社会を含めた包括的な生活の質の向上を目指すことの必要性について要点をまとめた。

key word: child care environment, resilience, play

キーワード：子育て環境，レジリエンス，遊び

1. はじめに

1.1 問題提起—こどもの“生きる力”の弱体化

現代の技術・消費文明は、利便性・機能性・快適性の追及から生まれ、人間の生活圏は、自然環境、都市（人工）環境、情報（言語、イメージ、ヴァーチャル）環境が混在する複雑系の様相を呈するようになった。IT技術の爆発的発達を伴う都市化は、現在も加速度的に進んでいる。このような文明を維持していくには、途切れのない資源供給が前提である。しかし、エネルギー・食糧資源の不足、CO₂クライシス、核や化学物質による汚染等が発生し、その前途は予断を許さず、持続可能性にもとづいた新しいパラダイムが求められている。

このような状況のなかで、人間一人ひとり、生き延びるために、各人の主観的・客観的・社会的状況に対応して、意識的にせよ無意識的にせよ自己が選択した（させられた）ポジションを取る

ことになる。そして、自身の生命・健康を保持し、生活の質（QOL）の向上を希求し、自己実現を図ろうとする。こどもについても、原始時代であれ現代であれ、黄金のベッドに生まれても藁のベッドに生まれても、オンリーワンの生命を大切に生きてゆこうとすることは同じだ。

「自然界の動物は生を受け、一律に本能に従い生き延び（サヴァイヴ）、縄張り（テリトリー）をつくり、社会（ソサエティ）を形成してゆく¹⁾」。これに対して、人間のこどもは成育や教育の条件により、その内容は大きく異なってくる。例えば、経済的に貧しい途上国や貧困層においては、こどもは生き延びることが第一の重要な課題である。一方、経済的に豊かであっても、必ずしもこどもにとって好ましいとはいえない環境が広がり、その結果、全体的に“生きる力”が弱くなってきている。これらは特定地域型の現象で、地域の政治

1) 法政大学スポーツ健康学部

2) 法政大学兼任講師

的・経済的・社会的・文化的な種々の要素と密接に関わっており、日本では日本独特の問題が発生している。

1.2 日本の社会制度の行き詰まり

近代日本の社会制度は、明治型・戦中型・戦後リベラル型と大別できる。現代は、戦後米国により民主主義に移行され、一見良いこと尽くめのようと思われる。しかし、上位下達型の官製民主主義では、本来一人ひとりの内発力が醸成されてしかるべきところ、画一的な教育のもと個々の人格がないがしろにされ、徒らに多数決の原理のみが一人歩きしてしまった。本来、「デモクラシーというものは、マッシーニが言うように国民の全てに通じる、最良にして最賢なる指導者の元に国民全般の進歩が図られるべきである²⁾」。ルソーはその政体論で、どの政体が優れているかは一概にはいえないとした。しかしながら、もし人民が皆神様のようにであれば民主制が優れているとし、人々が高い理想を持って心を一つに共感共同体（コミュニオン）が形成される^{3) 4)}ことを夢見たのである。これは精神的な貴族主義である。

私達日本人は、戦後の復興景気から始まり、一心不乱に経済的成長を追い求め続けてきた。経済復興により物質的には豊かになったものの、精神的には貧困となり、国にも国民にも求心力が乏しく活力が失われた。「この頃、戦中レジーム派は還暦を迎え世代交代し、物質的価値観、個人主義主体の戦後リベラル派にバトンタッチする。教育では戦前・戦中の名残を持たず、一切の精神的、道徳的教育を否定する。結果として、日本人は精神的基盤を喪失した⁷⁾」。

1985年を頂点に、その後の日本はいわゆる平成不況に突入する。共感共同体（コミュニオン）づくりはむなしく、国家の品格は著しく低下し、家庭崩壊、教育崩壊はとどまるところを知らない。現在の社会状況は、パン（福祉）とサーカス（興行）のみが関心事であったローマ帝国の末期と極めて似ている。「3S、すなわちスポーツ（興行）・スクリーン（AV文化）・セックス（風俗）により

日本は滅亡する⁵⁾」との予言はまさに的中しつつある。多数決至上主義の国民のポピュリズムとエゴイズムにより多くの制度が機能不全に陥り、実体と遊離したマスメディアによる無益な言語ゲーム（ウィトゲンシュタイン）⁶⁾は更なる不毛を引き起こしている。

20世紀の一時、世界にその存在感を示した日本も、このままではカルタゴのように枯死してゆく恐れがある。このような世紀末的状况に対して、我々は次世代の子ども達のために何を為すべきであろうか。

2. スポーツによる人創りの可能性

2.1 温故知新—現代のスポーツに求められるもの

日本人のプライドのために敢えて言おう。人間の最良の目標は物質的な生活水準の向上ではなく、理想を追求する立派な「人創り、国創り」であらねばならない。明治レジームで日本は鎖国体制を脱し、西欧を中心とする近代世界の荒波に突入し、独立国家として乗り切った。戦後の復興を支えた力は、心の片隅に祖国復興の大義を抱え持って働いてきた戦中派の人々である。“欲しがりません勝つまでは”のネバーギブアップ精神を持ち、歯を食いしばって頑張ってきた。今に生きる私たちは、過去に学びつつ、次の階段を切り開いていく以外にない。

政治的・経済的状況が大きく変わるなかで、わが国が世界にスピークアウトしてゆくには、時代に通用する人物を創ってゆかねばならない。ジェントルマンあるいは君子といわれる人物が備えるべき資質について過去に学べば、その基盤には武士道精神をひいた知行合一、文武一道の教育が必須である。日本の新しい世代の若い心の部分、魂の部分に磨きに磨き抜くことが唯一の策だ。

今日あらゆる国、あらゆる民族に対して拘束力のある一つの道徳律を引き出すことはできない。しかし、人類は共通の倫理、共通の芸術に到達する日を求めてゆく要がある。スポーツはその魁の役割を果たすものである。ここでいうスポーツは、いわゆる観るスポーツ（興行）ではなく、老若男女全

ての人々が日々自ら行うべき“みんなのスポーツ”すなわち“スポーツ・フォア・オール”である。

2.2 心身の健全な成長を導く環境とは

今日の技術・消費型文明は、こども達の日常生活から自然を遠ざけてしまった。スポーツの原点である遊びの環境が失われ、自然とともに生き、触れたり感じたりする機会が激減し、それとともに身体的活動も圧倒的に少なくなった。情報刺激受身型の生活様式が浸透し、社会的に要求される知識やスキルも同様に変化し、頭脳や神経の活動が一部に偏ったものとなっている。

人間は生命体であり、与えられた環境の中で変化に巧みに適応して生きてゆくようにつくられている。しかし、人間の遺伝子が数千年前と大きくは変わらない一方で、人間を取り巻く環境は短期間で飛躍的に人工化・技術化された。山野を移動し、厳しい自然のなかで生き抜いてきた生活から瞬く間に一変した環境のなかで、本来人間が持つ生態的なバランスに大きな影響が出てきているのである。

生命体の環境適応能力については、一般的に生体が受ける量的・質的な刺激量によって違いが出てくる。

【生命体の発達の前提条件】⁸⁾

—量的・質的な刺激が適切であると、健全に成長し営存する。

—量的・質的な刺激が多すぎると疲弊し、破壊される。

—量的・質的な刺激が少なすぎると退化し、萎縮する。

生命体に種々の刺激を適切に加えると、その適応能力（ホメオスタシス、免疫力）や運動能力が向上し、生命体としての系の安定性が高まり、健康や体力の向上につながる。これはオーバーロード・プリンシプル（過負荷の原理とスーパーコンペンゼーション）と言われているが、今まで狭義に運動能力のみに用いられていたこの概念が広く

生体に適用できることが明らかになってきた。

さらに、これは精神的領域についても適用できる。明らかに偏った歪みのある刺激のみ受容するような生活環境は、人々が健全な生を営んでいくにあたっても極めて問題である。多様で適切な刺激を受けられるような生活環境づくりが必要である。特に、社会的弱者であり、社会的能力を未だ身に着けていないこども達に、このような環境を整えていくことが何よりも重要である。

2.3 “自然に帰れ” — 『エミール』より^{9) 10)}

ジャン・ジャック・ルソー（1712～1778年）が“自然に帰れ”と主張した当時の18世紀のフランスでは、人間は階級によって区分されていた。神は国王を使者とし、国王を通じて人々を支配しているという「王権神授説」の教えのもとに聖職者、貴族、商人達が特権を有し豊かな生活を送る一方で、庶民は重税に喘いでいた。

人は神のもとに平等であるはずだという思いから、ルソーは腐敗した社会制度を変えるべく啓蒙思想家とともに「百科全書」の編纂を行った。当初、彼は広く知識を得れば人々は社会の矛盾に気づき、やがて社会改革につながると考えこの仕事を進めていたが、次第に知識偏重の教育に疑問を持つようになる。そして、確かに学問や芸術は知識にはなるが、知識の獲得と知性（インテリジェンス）や叡智（ウィズダム）の形成は必ずしも一致しないとの結論を得た。歪んだ体制で都合よくつくられた知識が、新しい社会を生み出す原動力になるなどありえない、善きものとして生まれてくるはずの人間も、この社会制度の中で知らず知らずのうちに墮落していくと。

そこでルソーは、新しい社会を生み出すには人間本来のあり方に従って教育することが必要であると考えた。その回答が著書『エミール』である。彼は人間形成に最も影響するのが環境であるとし、彼の仮想の息子エミールを自然豊かな田舎で育てることにしたのだ。当時のフランス中心部では都市化が進みつつあり、ルソーは自然のなかでのフィールドワーク（体験による学習）が重要だと考

えたのである。

振り返って考えてみると、日本では戦時中、米軍の空爆により大都市が焼き払われ、人々は郊外や疎開地に住むことを強要され、質素な生活をせざるを得なかった。戦後も一面の焼け野原のなかで、大人も子どもも一から生活を立て直さなくてはならなかった。皮肉にも、これこそまさにルソーが求めていた、田舎の環境に近かったのではないか。戦中・戦後直後に幼少時代を過ごした人々は、ある意味で理想的な教育環境にあったといえないこともない。ひたすら食べることを考え、闇屋や得体の知れない人々が身近に現れ、現実の社会というものを肌で感じながらの生活。戦中派の逞しさは、このような環境がプラスに作用した結果ともいえるのではないか。

ルソーは教育を三つの領域に分け、「自然の教育（人間の内的自然である器官や能力の内部的発展）」、「人間の教育（この発展をいかに利用するか）」、「事物の教育（育つ環境で自らが経験して獲得すること）」が調和してこそよい教育ができるとした。そして、これら全てを包括するのが自然（大自然の神秘）であるとしている。

戦後の復興期には、まだ地域（コミュニティ）における多様な人々との交流があり、自然は豊かで（あまり開発が進んでおらず）、事物による教育、人間による教育、自然による教育というものがあまり矛盾なく理想的なバランスで存在し、子どもは日々の生活をとおして一貫した生き方を学ぶことができたといえる。

その時代を典型的に示したのが、昭和30年代の日本の都市郊外を舞台に生きる庶民を描いた『三丁目の夕日』（西岸良平著）である。このなかで、子どもは自主性を大切にされ、自然・人間・事物による教育が理想的に行われているのを見とることができる。この年代に子ども時代を過ごした世代は、やがて三種の神器（車、クーラー、カラーテレビ）の時代に大人になる。日本はモノづくりの黄金時代を迎え、人々は憧れのアメリカ型のライフスタイルを手にする。

3. 子どもをどう育てるか

3.1 遊び空間の確保

現実的には、情報刺激受容応答型の生活様式を変えることは簡単ではない。個人の努力だけでは解決できないこともある。その中でいかに子どもの内的自然、外的自然を育むような成育環境を守っていけばよいのか。

物や情報が過剰に与えられるのに対し、子どもに真に望ましい物理的スペースや安全・安心がある程度確保された空間は圧倒的に不足している。子どもの生活圏における路地や遊び場は、自動車主体の道路のために分断され、潰されていく。社会の利便性を追及した結果、子どもには大きなハザードとなっている。

交通ネットワークの拡大はもちろん必要だが、大人が気づき、介入しなくては遊び空間は確保できない状況である。子どものためにどのような生活環境が望ましく、そこでどのように生活していくのか、成長のシナリオを想像し、その具現化のために環境を変えていかねばならない。子どもが自由に集い、思い切り遊べる空間を生み出していくことは、子どもの人間性を育み将来の可能性を広げることでもある。

学校教育はどうだろうか。カリキュラーワーク主体の従来型の教育から転換を図ろうとしつつ、抜本的には変革が進んでいない。どういう子どもを育てたいかという理念を欠いたままの、対症療法的な方法論的な取り組みは効を奏していない。主体的な行動をとるフィールドワーク、例えば遊びやスポーツ等のライヴな身体活動の機会は充分だろうか。家庭でも機会が激減している屋外でのフィールドワークの体験を、教育でどのように補っていくべきかは大きな課題である。室内遊びでも、「ありあわせの物を即興的にうまく構成する活動（ブリコラージュ）」¹¹⁾、例えば積木やパズル、レゴから様々な生活体験ができる場を提供できているだろうか。子どもの興味は大人の想像以上に広いのである。

3.2 経験ゆたかな指導者によるフィールドワーク

フィールドワークは、ナラティブ（物語性）を育み、物語性の構築には想像力^{12) ~22)}（夢やファンタジー）が不可欠である。また、現実を捉えた上で理想を設定し、その具現化を図るための知識や技術を習得し、実際にトライ&エラーを繰り返しながら理想に近づいていくというプロセスがある。こうして理想（目標設定）、現実（現状認識・分析）、実現（手段に基づいた行動）のサイクルが可能となる。

あそびやスポーツは擬態的な行動であるが、現実の社会を反映するマイクロ社会的なライブな活動でもある。人間社会も、身近な人間関係も、遊びやスポーツにおけるやり取りにも同じ構造があり、フラクタル（入り子的）なものといえる。

動物は本能に拠ってサヴァイヴ、テリトリー、ソサエティを自らつくっていくが、人間は本能だけでなく、より高度な関係性のなかで、物理的にも精神的にも、自分自身のサヴァイヴ、テリトリー、ソサエティをつくり守っていかねばならない。大人の社会は“我働くゆえに我あり”になりがちであるが、子ども時代には、夢や希望を語り、自由、創意、自発性を伸ばしてやるような環境を確保してやらねばならない。

また、人間は動物と異なり、言葉で実体を捉えることにより成長していく。従って、大人が早くから過剰な介入をしてはならない。発育段階に応じた多様なあそびを通して生きるなかで、フィールド（テリトリー）を共有しながら、各々の自律（サヴァイヴ）と連帯（ソサエティ）をつくり上げていくことだ。

想像力は生きる推進力である。それは、良いことであれ悪いことであれ、現実の世界には限界があるが、想像の世界では人間の限界を抜け、不可能も可能にすることができる。こどもの心には、いつも冒険心（男性性）とふるさと（母性性）の交錯（揺れ動くブランコ）がある²³⁾。これがロマンティズムの根源となっている。「山を想えば人恋し、人を想えば山恋し」（百瀬慎太郎）²⁴⁾の詩のように。

カリキュラーワークとフィールドワークについても同様な相補的關係がある。こどもの世界は、“我遊ぶ、故に我在り”が常で、ジョイ・オブ・ライフが感じられねばならない。それにはブランコの発動が必要だ。チクセントミハイ²⁵⁾は、人が喜びを感じるということを内観的に調べていくと、仕事・あそびに関わらず何かに没頭している状況であるとし、これを「フロー」と名付けた。これは外発的な報酬でなく、内発的な報酬である。この夢中になっている状況、無我の境地を少しのスライス・オブ・タイムでも体験させることが大切である²⁵⁾。

子どもを不幸にする一番確実な方法は、自分で獲得する前に何でも与えてしまうということである。これは未知への期待を込めた想像力を摘み取ってしまう。自ら感じ（感性）、考え、判断し（理性）行動すること、直感的ブリコラージュ（経験と感情の一致）を多様な体験のなかで積み重ねていくことが必要である^{26) 27)}。理性と感性のバランスがとれた行動は、遊びの繰り返しにより獲得されていく。

ルソーは『エミール』のなかで体験学習の大切さを語り、一冊だけ読ませたい本を挙げれば、それは『ロビンソン・クルーソー』であるとした。私はそれに『アルプスの少女ハイジ』や『トム・ソーヤー』等も付け加えたい。

4. これからの地域のあり方

4.1 生活の質の向上

最終的にまとめると、こどもが自由にのびのびと育つ環境は、量的な問題ではなく質的な問題となる。コミュニティでの生活の質（QOL）こそ、誰もが求めているものである。それには、表1に示すような「あいうえお」がスタンダードとして求められよう。

さらに、具体的な施策展開には、少なくとも以下の点が配慮される必要がある。

①環境、エネルギー及び食糧の自給についてのビジョンの構築。

②老若男女あらゆる人々の生命（明るさ、楽しさ、

たくましさ)が輝き出るような、共によりよく
 生きられる、共生共創が可能な新たな生活文化
 創出へのビジョン。

- ③都市基盤整備、特に居住空間の充足を急務とし、
 地域ごとに自給的或いは連携的な経済圏をつく
 り、都市の自立とコミュニティの形成を積極的
 にはかること。これはあらゆる都市化区域、と
 りわけ中小の都市において必要とされる。
- ④生活の質の向上につながる健康・環境・教育・
 芸術・文化・福祉・スポーツ・観光政策等につ
 いては、地域連携と開かれた地域間交流を前提
 条件として、産・官・学・民の全てが協力し、
 明確な目標を設定して取り組むこと。
- ⑤日本独自の文化を創造し、世界へと発信してい
 くための健康・環境・教育・芸術・文化・福祉・
 スポーツ・観光領域の調和的・総合的な振興。

4.2 新しい倫理学の提示

そして、これらの根底に、今までの倫理学では
 なく自然、技術環境、情報環境の全てを包括する
 倫理学であるエコ・エティカ(生圏倫理学²⁸⁾)が
 適用される要がある。エコ・エティカは、生命倫
 理、環境倫理や技術倫理など、あらゆる分野で人
 間の行動指針となる倫理が問い直されているなか
 で、これら一切を含む「人類の生息圏の規模で考
 える」倫理学である。また、地球の持続可能性が
 議論されるなかで、人類の営存のために高度技術

社会における人間の生き方を考え直そうという新
 しい哲学である。人間中心であった倫理学が環境
 倫理学へとシフトするだけでは不十分で、生命全
 体主義(テイラーによるバイオセントリズム)が
 唱えられるようになった。今道友信は、これらを
 包括したエコ・エティカを提唱し、宇宙まで拡が
 る人類の居住圏に対応する倫理の必要性を示した
 のである。

これは、アルベルト・シュバイツァーが「生命
 の畏敬」、すなわち、生きようとする己の生命は同
 時に、生きようとする生命に囲まれている。この
 生きとし生けるもの(生あるものすべて)の生命
 を尊ぶことこそ倫理の根本であると述べたこと
 と軌を一つにしている。シュバイツァーは、文化
 への復帰は倫理的運動であると述べ、倫理とは自
 己の人格の内面的完成をめざす行動であるとして
 いる。

いわゆる機能主義といわれるデカルト分割、計
 量化、近似化による施策は(等価性の交換と平等
 性に基づくものだが)、物事、特に自然環境をその
 ように割り切ることができないことから、大きな
 矛盾やきしみが生じている。私たちが明治開国以
 来、脱亜入欧して追いかけてきたモダニズム
 は、自然環境を一方向的に略奪し、死と荒廃と汚染
 を次々に生み出して、地球の寿命を確実に縮めて
 しまった。IT革命も、情報の飽和化によってエン
 トロピー増大による熱死と同じように、情報増大

表1 生活の質(QOL)の追求におけるキーワード

あ：安心・安全	医療・保健、保養・癒し、国防・民生などの人々の安心や未来への展望、 生活基盤系の整備、ハードからソフト・ヒューマンへの展開など
い：いきいき	健康、職業、日常生活、地域社会(人間関係、家族関係、生涯教育、余暇、 地域文化、スポーツ、芸能)など
う：うつくしい	ハード環境(公害・環境汚染・自然破壊対策)、景観保全、都市計画、都市 デザイン、ソフト環境(keep beautiful movement)、ヒューマン環境(nice communication、倫理の確立)など
え：笑顔	楽しさ、joy of life、エンターテイメント、笑う門には福来たる、楽しさ の演出(ハード、ソフト、ヒューマン)、祭り・イベント、カスタマーズ・ サティフィケーション、サービス
お：おどろき	自己発見から冒険まで(恐れ、おののきから自己創造)、唯一無二性、地域 特性をふまえた、地域ならではの魅力の提示

による情報死の危機に向かっている。自由に情報を選択していると思ってもそれは幻想であり、機械化・自動化したその日暮らしをして、消費文明社会の大きな流れのなかに巻き込まれてしまっているという状況である。

一方で、先進国では労働と余暇という枠組みがなくなりつつあり、生活を全体としてとらえ、真の“ゆとり”や“あそび”、“やすらぎ”はどうあるべきかが問われている。あふれる情報から自分を取り戻すために、言語性（自らのアイデンティティのメッセージ化）と身体性（自らのアイデンティティそのもの）が再び認識され始め、芸術・文化・スポーツ（メディアスポーツではなく、スポーツすること、すなわちスポーツ・フォア・オール）の重要性がいわれるようになってきたのである。

4.3 地域の魅力、オンリーワン性

わが国の文化の特徴は、その多様性、簡索性、そして幅広い包容性、寛容性にある。さまざまな要素が、あるときはハーモニック（調和的）に、またあるときはシンフォニック（交響的）に併存、共生、共創しているのである。つまり、単なる文化移転ではなく、文化変容を起こし、場合によっては似て非なるユニークな日本独特の形式を生み出しているのだ。

日頃見逃しがちだが、日本文化のオンリーワンの魅力はまさしくそこにあるといってよい。私たちはこれらを正しく理解、認識し、継承すると共に、どれだけ先人から継承し、どれだけ自らが創り出していくかを見極めなければならない。それぞれの地域共同体がスピリットを得て、共感共同体（コミュニオン、“おらが村”、“私達の街”）となる時こそ、わが国の次の百年の計への布石が始まる。

計量化・指標化され得るものだけが価値があり、メディアに動かされた社会の状況が人々の意識を左右してきた時代は終わりつつある。インターネットなどにより個人が直接アクセスできるブロードバンドが普及し、沈黙していた個人やマイノリ

ティが発言する機会を得るようになった。社会の評価基準とは異なっても、オンリーワン性というか自燈明というか、自分がこれでよいと信じるものがあれば、それを主張して社会にメッセージを投げかけることができるようになってきたのだ。

名所や旧跡、あるいは聖地とされているところも、かつては無名だった。それが言葉によって語り継がれることで、神話・説話・物語り（ストーリー性）が発生し、記号として生命を得る、すなわち情報化以前の状態からリアリティーを獲得したのである。今道は、「日本の伝統においては、真と誠と信がもともと“まこと”としてひとつであり、日常的所与としての事（こと）が言（こと）によって意識され、課題としてしごと（仕事）となり、まこと（誠）をつくす時に、やがてまこと（真）がえられる」と述べた。ここには単に対象化することによって見られる形の哲学ではなく、自己が“わがこと”として“こと”とひとつになるときに双方が高まって美しい（ま）ことの成立する一如世界に遊ぶ哲学が考えられている。しかし、「“こと”が“まがいもの（reale）”の世界、技術的に制作されたものの連関である場合、そのようなreale（ものらしきもの、まがいもの）と一如になることは問題である」と述べて、エコ・エティカの必要性を説いている²⁹⁾。

いくら新しいリアリティーを生み出そうとしても、まがいものであっては認知されないという点が重要である。イェルサレム、ルルドの洞窟、アッシジの聖サンスランシスコの丘、あるいはヒンズーの聖河ガンジスなどは、無名の土地がある文化の枠組みのなかで神話性を有することで、本物の意味づけが成り立った場所である。

モダニズムの等価性、平等性の価値観万能になってはならない。単純な客観的・社会的比較（ベター、ベスト指向）というような相対評価ではなく、オンリーワン性という考え方も大切なのだ。一人ひとりの生命は、唯一絶対のものであり、一回限りである。これを東洋哲学では“命”とっている。オンリーワン性とは地域を無機的に捉えるのではなく、生命性を有したものとして捉えよ

うということである。命とは、いまここにあり (now&here)、覚醒すればそれは永久 (now&forever) なのである。時が止まるのだ。

よくいわれる「魅力とは何か」を考えてみる。これは、哲学の世界でも大問題なのだが、ミシェル・フーコーは「惹きつけられるものがあるからであり、惹きつけられるものを正当化するものは何もなく、ただそれが気に入ったからだ」といつている。芸術的な作品にしても科学的発明にしても、偉大なものは全て個人の所産であるかごく少数のチームワークの結果であり、巨大な機構や組織とは関係なかったということである。

かつての偉人や聖人あるいは英雄はおしなべて自己を偏愛し、自分の価値判断を重んじるといった頑固な個性と信念、愛情（愛、博愛）を有する人間である。つまり、未知の潜在力（ポテンシャル）を信じ、探し出し、創りあげてゆくことが大切で、フーコーはそれを「記号を目覚めさせる」といつているが、それには大自然の力が必要なのだ。ベンチャーにはアドベンチャーがつきものだ。予定調和のグリーンハウス（温室）からは真の“実り”はもたらされず、促成栽培の野菜のようなもの（まがいもの）しか生まれえない。情報化社会におけるすべての情報は誰にとっても平等に存在するが、必要な情報をどのようにして深淵からすくい上げるのかという点は個人に委ねられている。

5. おわりに—甦れ心と体

ヨハネ福音書の冒頭文は「はじめに言葉ありき」であるが、これはロゴス＝言葉とした代入翻訳である。プラトンによれば、言葉は外なるロゴスで思考は内なるロゴスである。ソクラテスは、思考とロゴスは同一であるとして、論理・知性・理性を指した。しかし、いかに生きるべきかという哲学を知への愛として創造的に規定するとき、プラトン自身もロゴスを超えてミュトス（神話）、即ち想像力により語らねばならなかった。

私たちが身体を有する人間として外界にあたる時、パトス（情念・感性）を無視できない。ミュトスこそ、ロゴスとパトスの弁証法的統一であ

ろう。すると、「初めに心ありき」がヨハネの言わんとしたことか。しかし、ゲーテは、『ファウスト』で「はじめに行為（事実）ありき」と述べた。ヒューマニスト、ゲーテの面目躍如だ。では、現代の私たちはどう語るか。初めに何があったのか。ビッグバンがあり、“ゆらぎ、ファジー、あそび”により宇宙が誕生し、太陽系の水惑星である地球という稀有な環境に生命が発生したと考えられている。「初めに生命（身体）ありき」。これこそ厳然たる出発点だろう。

こどもは瑞々しい生命力に満ち溢れている。燃えている火のような存在である。大地の上で花に吹く風のように、自在に生きてゆく力を育てやらねばならない。生誕直後のこどもは、手足を活発に動かし声を出す。これがリズムやハーモニーに対する感受性により導かれ、踊りや歌というかたちになっていく。動物には見られない人間の特質である。プラトンは、美しいとか力強いというような個々の要素ではなく、心身の調和、全体のバランスや中庸が大切であるとした。踊りや歌などの身体活動は、人間の魂の状態や性格の特徴が表出したものであり、あそびを正しく導けば、若い者を徳の方へ連れてゆくことができるというのが、彼の教育論の骨子である。

「這えば立て、立てば歩めの親心」というように先を急いだり、こどものうちから専門化の袋小路に引き入れることも避けるべきである。言葉やイメージ中心の間接体験によるカリキュラーワークと身体全体を使う直接体験によるフィールドワークのバランスがあつて初めて、効果的な自己形成、心体一如の教育が可能なのだ。その点で、遊びやスポーツなどの社会のミミクリーを含む諸活動は極めて重要である。ルソーは、まず人間の能力と器官の内部的発展段階（感覚的生）があり、自分を取り巻く環境について判断し経験を積み重ねてゆき（機能的生）、そして絶対者・自然・自己についての展望が拓かれ幸福感や理想をもつようになる（道徳的生）。そして、これら全ての根底にある原始的傾向こそ人間の自然であるとした。つまり、彼が主張したのは、人間の生命の衝動、漲

り、甦りの生成過程ではないのか。

高度情報化社会のなかで、今こそこどもに相応しい環境とはどうあるべきかについて真剣に考えていかねばならない。温室の促成栽培ではなく、自然にさらされた露地栽培のような環境、こどもの野生を引き出し、健全な心身の育成につながるゆたかな環境を創り出していくことが必要である。

参考文献

- 1) 「攻撃、悪の自然誌」、コンラート・ローレンツ著、日高敏隆・久保和彦訳、みすず書房、1988年
- 2) 「先哲講座」、安岡正篤、到知出版、p218、1993年
- 3) 「先哲講座」、安岡正篤、到知出版、p214、1993年
- 4) 「ルソー」、桑原武夫編、岩波新書、p112、1966年
- 5) 「運命を創る」、安岡正篤、プレジデント社、p38、1991年
- 6) 「現代思想 総特集ウィトゲンシュタイン」、斎藤公孝、青土社、p402、1992年
- 7) 「山田方谷の思想と藩政改革」、桶口公啓、明德出版社、p14～、2011年
- 8) “Sportmedizin -Arbeits-und Trainingsgrundlagen”, W.Hollmann, Th.Hettinger, F.K.Schatlauer Verlag, Stuttgart-Newyork,pp1 - 5, 1980
- 9) 「ルソー」、桑原武夫編、岩波新書、pp95 - 105、1966年
- 10) 「エミール 上・中・下」、J.J. ルソー、今野一雄訳、岩波書店、1974年
- 11) 「野生の思考」、クロード・レヴィ=ストロース、大橋保夫訳、みすず書房、pp22 - 29、2001年
- 12) 「シュタイナー教育の方法」、高橋巖、角川選書、1992年
- 13) 「シュタイナー教育を語る」、高橋巖、角川選書、1990年
- 14) 「シュタイナー哲学入門」、高橋巖、角川選書、1993年
- 15) 「治療教育講義」、ルドルフ・シュタイナー、高橋巖訳、ちくま学芸文庫、2005年
- 16) 「ミヒャエル・エンデ」、安達忠夫、講談社現代新書、1988年
- 17) 「ファンタジーを読む」、河合隼雄、講談社+α文庫、1998年
- 18) 「昔話の深層 ユング心理学とグリム童話」、河合隼雄、講談社+α文庫、1998年
- 19) 「昔話と日本人の心」、河合隼雄、岩波現代文庫、2010年
- 20) 「ホモ・ルーデンス」、ホイジンガ、高橋英夫訳、中公文庫、1973年
- 21) 「遊びと人間」、ロジャー・カイヨワ、清水幾太郎・霧島和夫訳、岩波新書、1970年
- 22) 「スポーツの本質と基礎」、カールディーム著、福岡孝行訳、法政大学出版局、1976年
- 23) 「六十年の登行と滑降 一教育とは何か」、山口一孝、有限会社啓陽社、p153、1981年
- 24) 「山を想えば人恋し、人を想えば山恋し」、石原きくよ、郷土出版社、p180、1993年
- 25) 「フロー体験入門、楽しみと創造の心理学」、チクセントミハイ、大森弘監訳、世界思想社、2010年
- 26) 「情緒と創造」、岡潔、講談社、p52、2002年
- 27) 「教育の冒険（日本の自画像Vol.3） うら梅の会編、西部邁、碓定一、笠井逸子、橋本稔、木村雅信、三浦清一郎、寺脇研、森孝一、大中幸子、葦書房、1995年
- 28) 「エコ・エティカ」、今道友信、講談社学術文庫、2001年
- 29) 「現代の思想」、今道友信、日本放送出版協会、p 263、1987年